

2009年 1月1日

【新年礼拝説教】

「キリストの思いを抱いて」

牧師 武田 真治

コリントの信徒への手紙 1、2章 10～16節

箴言 29章 18節

1、プロテスタント150年

あけましておめでとうございます。新年の最初の日の礼拝に、こうして教会で礼拝を迎えられる幸いを思い、また集われた皆様の上に神様の御導きと御支えがこの一年も更に豊かにございますように祝福の祈りを献げます。

実は今年は私たちにとって記念の年でもあります。それは、プロテスタント教会の信仰がこの日本に伝えられて150年目を迎えるからです。

ご存じの通り、カトリック教会の信仰を日本に伝えたのはイエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルです。彼が1549年に来日した時からキリスト教の日本での伝道が始まりました。

しかし、鎖国政策やキリシタン禁令などがあり、プロテスタント信仰の伝播は三百年も後になってしまったのです。

しかし、1858年（安政5年）に日米修好通商条約が結ばれ、その条約に沿って翌年には横浜や長崎や函館などの港が開港され、この年に日本伝道への志と幻を持った宣教師たちが中国を経由して日本に渡って来たのです。従って、日本におけるプロテスタント教会の伝道開始は1859年になるのです。（もう一つ、沖縄に宣教師が到着した1846年を始めとする捉え方もあります。ただ、その時はまだ琉球王国ではありましたが。）

この年、いち早く伝道の先鞭を付けたプロテスタントの教派は一つだけではなく三つありました。聖公会とオランダ改革派教会とアメリカ長老教会でした。

おそらく、最も早く日本に着いた宣教師は聖公会のリギンズ師とウイリアム師と言われています。

ただ、ウイリアム宣教師は中国でマラリヤに感染し、その療養のために長崎に来航したのであり、最初は純粋に伝道のためではなかったようですが、その後、日本伝道に活躍されます。

彼に少し遅れて、長老教会からジェームス・カーティス・ヘボン（正しくはヘップバーン）宣教師とその妻クララ・メアリーが横浜に、改革派からブラウン宣教師とシモンズ医師が神奈川に、フルベッキ宣教師が長崎に、と各々正式に派遣されて来日されたのです。そのように、プロテスタント教会の日本における伝道が開始されました。

以後、たくさんの宣教師がアメリカだけでなく全世界から遣わされて日本で伝道をして下さったおかげで今を迎える訳です。このように私共日本のプロテスタント教会の根っこには、こ

れら宣教師の方々の日本伝道への熱意と志があったことを否定することはできません。

私たち広島教会も、この時来日した改革派と長老教会の宣教師たちに端を発しています。

今年は、私たちの教会は創立126年になります。また伝道開始は更に2～3年前になりますから、プロテスタント教会の伝道開始から考えると、かなり早い段階からここでの伝道が開始されたことが分かります。このことは改めてすごいことだと思わされます。

もし、今の私たち広島教会の様子をヘボン宣教師やブラウン宣教師が見られたら、どのような感想を持たれるだろうかと思います。また、特に現代の教団のあり様をどういう思いで見られるでしょうか？

プロテスタント教会伝道開始150周年を記念することは、私共なりにこの日本への伝道の熱意と志を新たにしていくことこそその真の思いではないかと思います。

2、幻を持たない者は？

今日の旧約聖書の言葉は、箴言29章18節です。ここには『幻がなければ民は墮落する。教えを守る者は幸いである』とあります。

ドイツの大統領ヴァイツゼッカーがかつてこの言葉を元にして「幻なき国は滅びる」という演説をしたことは有名ですが、まさに私たちもこの広島への伝道の幻（ビジョン）を持っていなければ「墮落してしまう」と本当に思います。

アドベント（待降節）に旧約聖書の『ハバクク書』を読みました。

預言者ハバククが厳しい現実の状況に囲まれながらも、尚『私は静かに待とう』と言い切れたのは、神様から「幻」を与えられたからでした。その幻を見ることによって困難の中にも神様による導きと解決を待つことが出来るようになったのでした。私たちも幻を持つ時に、なおしっかりと生きていける信仰の力を与えられるのです。

昨年も、多くの信仰の先輩をこの教会から天へとお送りしなければなりませんでしたが、皆さん、宣教師の方々のように、広島伝道の幻に生きた方々でした。そのようにして、この教会の礎となって下さいました。その志を受け継ぎ、良き伝道の幻を持ってこの一年を歩んで行きたいと願っています。

3、最初のプロテスタント教会

今日は最初に日本におけるプロテスタント伝道の歴史を垣間見ましたが、では、日本における日本人による最初の教会はいつ、どこで誕生したのでしょうか？

教会堂そのものは、聖公会の宣教師の手によって来日してまもなく横浜にクライスト・チャーチを建てられています。日本人による教会の設立は、1872年（明治4年）横浜で、宣教師ジェームズ・バラのもとで信仰を養われた11人の日本の信者たちが自ら設立した「日本基督公会」（現在の横浜海岸教会）であると見做されています。

実際、今でも横浜海岸教会の敷地の一角には「プロテスタント教会発症の地」という石碑が建てられているそうです。その碑には、設立礼拝が献げられた1872年3月10日にバラ宣

教師が説教をされた、その説教箇所が刻まれています。

その箇所とは旧約聖書のイザヤ書 3 章 15 節の言葉です。

即ち『ついに、我々の上に霊が高い天から注がれる。荒れ野は園となり、園は森と見なされる』です。

あのペンテコステの時に聖霊が天から下されて世界で最初の教会が生まれたように、この日本に住む者の上に聖霊が注がれ、日本で初めてのプロテスタントの教会が生まれたことを語っています。そして、そのようにして教会がたくさん作られていくことによって、この日本の地が不毛の荒れ野から豊かな生命を育む「園や森」へと変えられていくであろうという希望がみごとに語られている聖書の箇所です。

この希望こそ宣教師たちが持ち続けた日本伝道への「幻」でもあったのではないのでしょうか。その志は、その後、この日本に生まれてくる信者たちにも引き継がれていったのでした。

そのようにして約 130 年前にこの広島にもみ言葉が伝えられたのでした。この地に聖霊が注がれ、この広島の地が「園」となり「森」となっていくようにと。

その思いを引き継ぎ、私たちもこの日本が、この広島が神様にとっての「豊かな園、生命を育む森」となっていくことをこれからも願って行くものでありたいです。

4、神様の霊を受けた者として

150 年前にこの日本に注がれた聖霊は、今の私たちの上にも与えられています。洗礼を受けた時に、牧師から一人一人の頭の上に手が置かれ（按手）、一人一人の上に聖霊が付与されるのです。

今日のもう一つの聖書の箇所であるコリントの信徒への手紙 1、2 章 12 節には『わたしたちは、世の霊ではなく、神からの霊を受けました。それでわたしたちは、神から恵みとして与えられたものを知るようになったのです』とあります。

ただ、この新共同訳の翻訳が少しはっきりしないので、分かりやすく訳し直しますと『それでわたしたちは、神から与えられたものを恵みとして知るようになる』です。

つまり、神様から私たちはたくさんのもので与えられ、プレゼントされているのですが、普通は、自分にとって都合がいいと感じる事柄に対しては「ああ、神様からの恵みだなあ」と感謝できます。しかし、気に食わない物や自分にとって辛い出来事に対しては、とてもそれらを「恵み」としては考えられないものです。ところが、ここで言われていることは、洗礼を受けることを通して「神からの霊」を与えられた者は、神様が自分に与えられたすべてのことがらを、それらはすべて「恵み」として受け止めることが出来るようになるということなのです。

たとえ困難な状況に見えることでも神様がこれを私に用意されたとするならば、それは私にとって「良きこと」に違いないと受け入れることが出来るのです。それが聖霊を与えられた者の認識だと言われているのです。

14 節には『自然の人は神の霊に属する事柄を受け入れません。その人にとっては、それは愚かなことであり、理解できないのです。霊によって初めて判断できるからです』とあります。

神様の霊を与えられて初めて、神様の導きやご計画が分かるようになるのだと、だから聖霊を下されてこそ、神様が自分に与えてくださっているものがどれほど豊かな意味を持っているものであり、恵みに満ちているものなのかが分かるようになると言われていました。

日本におけるプロテスタント伝道も、この広島伝道も色々なことがありました。一つ一つのことを神様から与えられたこととして受け止め、悔い改めながら、更に伝道の「幻」を持って生きていくものでありたいです。

(1月1日 礼拝説教 抜粋)